

1. 乳がん検診導入に向けた認定制度と精度管理の普及促進事業

富士フイルム株式会社

【現地の状況やニーズなどの背景情報】

タイにおいては、乳がんの早期発見につながる検診制度の導入に関心はあるものの、いまだ着手できていない状況にある。日本では、検診制度の導入にあたり、品質認定を導入してきた経緯があるが、タイではそのような概念が普及していない。また、タイの医師の多くが欧米で教育を受けてきた経験から、アジア圏での情報交換の機会が少ないことがある。

【活動内容】

技術の品質認定や制度管理、乳がん検診現場を視察するための来日研修と、乳がん検診の概要や日本での乳がん検診導入までの経験と制度管理の現状などを知ってもらうためのセミナーとシンポジウムをタイにおいて開催する。

【期待される成果や波及効果等】

タイ国内において対策型乳がん検診制度の導入に向けた機運が高まること、制度管理などについて既存のガイドラインの修正や新たに基準を導入することの必要性について認識と期待が高まり、結果として将来的には乳がん検診制度が導入され、乳がんの早期発見につながり、タイ女性の QOL 向上に貢献することが期待される。

<研修実施結果>

7月 専門家派遣（11名）

- ・現地ニーズのヒアリング、意見交換
- ・医療関係者を対象としたセミナーを開催

9月 研修生受入（5名）

- ・精中機構主催のモニター講習会視察（東京）
- ・富士フイルムによる講習会内容のフォローアップ

10月 研修生受入（5名）

- ・精中機構主催のモニター講習会視察（名古屋）

- ・富士フイルムによる講習会内容のフォローアップ

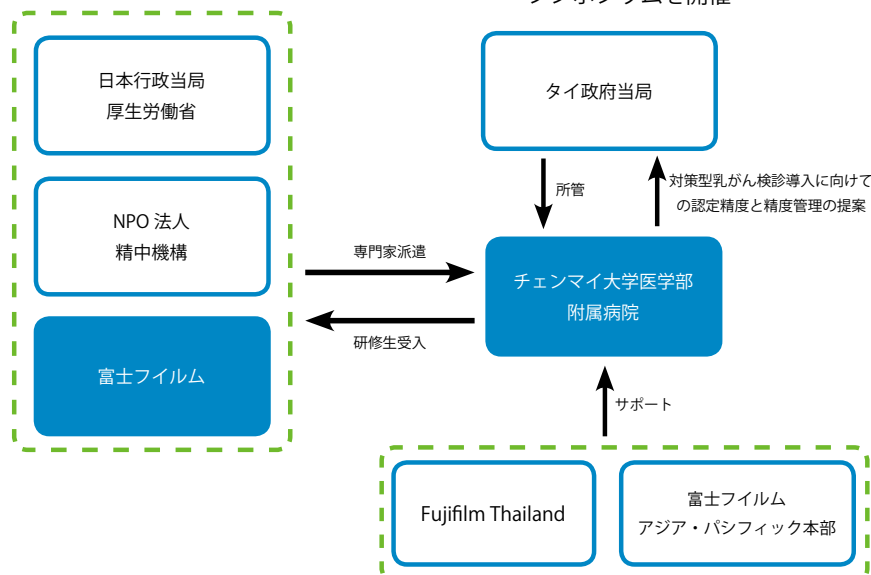
- ・乳がん検診施設の視察

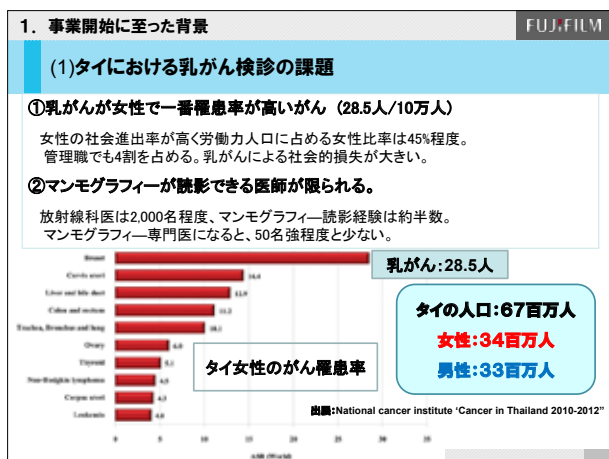
10月 専門家派遣（10名）

- ・撮影の技術認証と機器の精度管理に関する意見交換
- ・ハンズオンセミナー開催

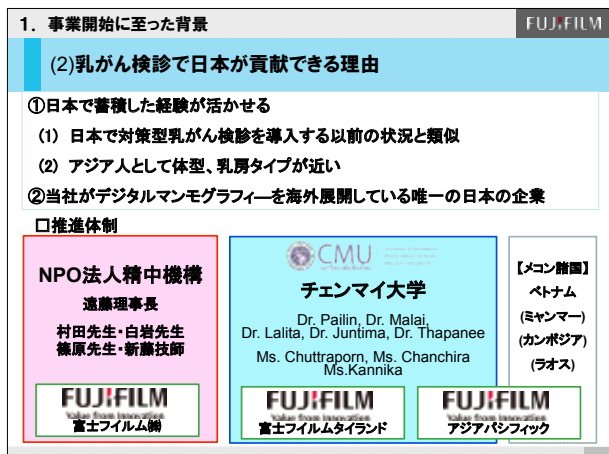
11月 専門家派遣（13名）

- ・周辺の大学医学部や主要病院と連携してシンポジウムを開催



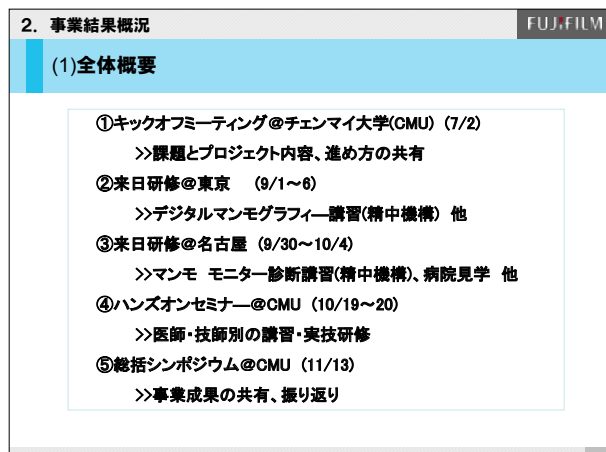


タイ国における乳がん検診導入に向けた認定制度と制度管理の普及促進事業についてご報告します。事業開始に至った背景として、タイにおける乳がん検診の課題があります。タイに行かれたことがある方はご存知かと思いますが、タイでは女性の社会進出がかなり高い状況にあります。労働力人口に占める女性の割合は、ほぼ半分です。その中には管理職になられて活躍されている女性も非常に多いので、課題の1つとして、このような女性ががんの罹患によって離職、もしくは休職に至った場合の経済的な損失が非常に大きなものになることが挙げられます。また、2つ目の課題は、マンモグラフィーの読影ができる医師に限られることです。放射線科医としては2000名程度いらっしゃるのですが、読影できる先生はさらに絞られますし、マンモグラフィー専門医に至っては50名ぐらいと非常に少ない状況です。



背景の2つ目としまして、このようなタイにおいて、日本の経験が活かせるのではないかと考えております。現在のタイの状況が日本における対策型乳がん検診を導入する以前の状況に似ていることと、日本人とタイ人は背格好、体型や乳房のタイプが近いことが理由です。これらに加えて弊社がデジタルマンモグラフィーを展開している唯一の日本企業ということを考えまして、今回の事業を行ってこうなった次第です。推進体制ですが、NPO法人精中機構の遠藤理事長を始め、村田先生、白岩先生、篠原先生、新藤技師、そしてタイのチェンマイ大学の Pailin 先生

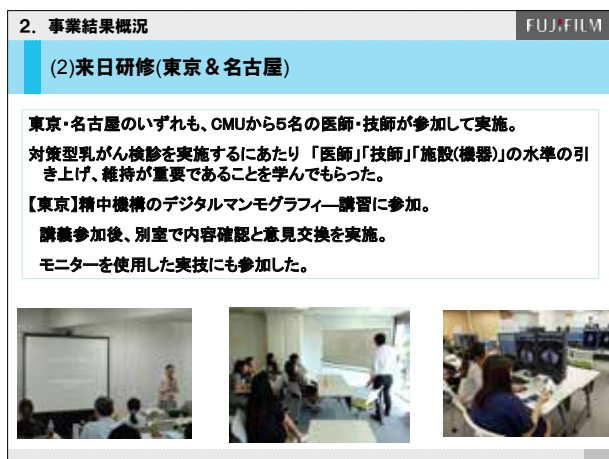
や Malai 先生を中心に多くの医師の方にご協力いただきました。この場を借りて改めてお礼を申し上げたいと思います。



我々の活動内容ですが、大きく5つのイベントを開催しました。7月頭のチェンマイでのキックオフミーティング、2回の来日研修、タイでのハンズオンセミナー、そして11月の総括シンポジウムといったイベントを推進してまいりました。



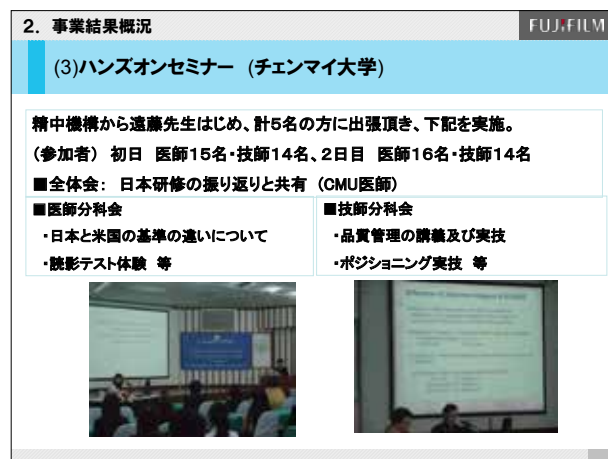
キックオフミーティングですが、7月上旬にチェンマイから10名、精中機構から5名に出張いただいて実施しました。まずは弊社からプロジェクトの全体概要を説明した上で、チェンマイの Pailin 先生からタイにおける乳がんの現状及びスクリーニングの現状をご紹介いただきました。その後、遠藤先生から日本でのQC活動の立ち上げ経緯をご説明いただき、白岩先生から精中機構の活動である読影講習会等のご紹介、村田先生から日本の乳がん検診と集団検診の現状をご説明いただきました。技師関連では、新藤技師からマンモグラフィー撮影方法、篠原先生からは必要な機器等の品質管理についてお話しいただきました。



これを受けて、次は来日研修という形で、今回のプロジェクトで現地のコアになっていただく医師と技師の方に5名来日していただいて、名古屋と東京で1カ月間、勉強会を開催しました。東京では、精中機構のデジタルマンモグラフィ講習にタイミングを合わせて参加していただきました。どのような活動をしているのかを体験した後、講習が日本語で開催されているため、別室の会議室で担当者から英語の追加説明や質疑応答を行いました。時間が許す限り、写真にもありますようにモニター等を使って実技も体験していただき、理解を深めていただく場にしました。



名古屋においても精中機構のモニター診断講習に参加していただけるタイミングで実施させていただきました。名古屋医療センターを見学させていただいた後に講習に参加しました。東京での経験を活かし、この場では講習自体をビデオに撮らせていただき、そのビデオを別室で講演しながら勉強会を実施するという形で行いましたので、さらに理解を深めていただけたと思っています。この場でも最後に読影テストを体験していただくなど、実際に日本でどのような水準で教育をして、認定のテストをしているかといった一連の流れをご理解いただけたと思っています。



これらを踏まえて、今度はさらに多くの方に日本の研修を体験していただく目的で、場所をチェンマイ大学に変えてハンズオンセミナーを実施しました。初日と2日目の両日ともそれぞれの参加者に同じ内容を行ったのですが、2日とも約30名ずつ合計60名ぐらいの方に参加していただきました。全体会の後、医師分科会、技師分科会を実施し、日本と米国の乳がんの関連の基準の違いについて共有したほか、読影テストの体験をしていただきました。技師の分科会では、機械やデータの品質管理の説明や、マンモグラフィの装置を使った実技を行い、「このように行えばさらに患者さんに優しいですよ」といった点など、実際に物を使って紹介しました。



こちらは医師の分科会の様子です。EIZO社の協力を得て、高精度モニターを9セット設置し、日本の先生方は3セットの液体を現地の先生方と一緒に使って、時間をかなり割いて実技を行いました。技師の方も同じく品質管理の手法を学び、マンモグラフィの機械での実技を行いました。乳房のファントムを付け、どのように圧迫をしていくことによって、患者さんがより不安のない状態で、正しい写真が撮れるかという勉強会をさせていただきました。特に実技の面に関しては、かなり好評を博した状況でした。

これらを踏まえ、最後はシンポジウムを開催しました。

2. 事業結果概況

FUJIFILM

(4)シンポジウム (チェンマイ大学)

CMU医師・技師10名,その他機関の医師44名(ベトナム医師2名)、技師14名、日本大使館唐木一等書記官、精中機構から5名が参加し、総括を実施。
日本側から「乳がん検診における精度管理」の重要性他の講義を実施。
CMU側からは、精度管理及び啓発活動を継続することの重要性と実施にあたっての人的リソース他の課題提起がなされた。

チェンマイ大学において CMU の技師と近隣の医師の方にも来ていただき、最後の総括の会を実施しました。日本側からは今回の活動における重要性の再確認のための講義で、チェンマイの方からは今回理解したことに加え、タイにおいての課題、例えば人的リソースが不足している等の問題提起がなされました。

今回の成果ですが、まずは対策型乳がん検診制度の導入

3. 事業の成果

FUJIFILM

□事業目的:

「対策型乳がん検診制度」の導入の道筋を日本の事例をモデルに共有する

□プロジェクトの結果

プロジェクトを通して日本のノウハウ、自国に合ったガイドライン等を作っていくことの重要性の共有化を図ることができた。
特に、「診療」ではなく、「**検診**」に必要な項目につき、理解を深めて貰えた

- ①標準化: 多数の医師、技師の技能を標準化し、維持する
- ②品質: 施設の装置の品質定義及び管理の必要性
- ③啓発: 検診の内容・意義の宣伝

の道筋を作るという意味では一定の成果を得られたと考えております。特にタイのそれぞれの先生はかなり優秀な方がいらっしゃいますので、改めてマンモグラフィーが何なのかという説明をする必要がない方は多くいらっしゃいます。ただ全体のニーズが少ないこと、そして検診するために標準化、品質、啓発が必要であるという認識を持っていただきました。

最後は今後の課題なのですが、実質としては今申し上げ

4. 今後の課題

FUJIFILM

□今後の課題

- ①「対策型乳がん検診」実施に向けた課題認識の普及
北部はCMUを中心に、バンコクでも国立病院、国立がん研究センター(NCI)を巻き込み、更なるKOLの発掘を進め、「対策型乳がん検診」に必要な基盤づくりを促していく。
- ②タイ政府、国立がん研究センター等の巻き込み
将来的な国レベルの活動に繋げ、タイ独自の乳がん検診のガイドラインを策定していくためにも、タイ政府やNCIを巻き込んだ活動に拡大していく必要がある。
- ③乳がん検診の啓発運動
乳がん検診の重要性を医療機関のみならず、タイ国民に広く周知していく為にも、ピンクリボン活動等を通じた啓発運動を強化、継続していく。

当社としても、富士フイルムタイランドを中心に、活動を継続していきます。

た標準化、品質、啓発を行うためにはまだ継続して時間も人もかけてやっていく必要があると考えております。1つの拠点だけでなく国を巻き込んで、一般の市民の方も巻き込んで、乳がん検診が何であるかを理解していただく活動をきちんとやっていきたいと考えております。

以上で報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。